

龍谷大学

RYUKOKU UNIVERSITY

実践的な学びによって グローバルに通用する 課題解決力と リーダーシップを養成

来春、龍谷大学は一挙に2学部を新設する。京都市深草キャンパスに設置される国際学部(2015年4月開設予定)、滋賀県大津市瀬田キャンパスに設置される農学部(2015年4月開設予定(設置認可申請中))では、どのような人材の育成を目指しているのだろうか? 社会的にも注目されている「グローバル化」「食と農の問題」というテーマに取り組む両学部の教育内容について教授陣に話を聞いた。

取材・文/伊藤敬太郎 撮影/二村 海



2015年4月、国際学部と 農学部が新たに登場

政治、経済、環境、食料、エネルギーなど、今、世界と日本にはさまざまな課題があふれている。「地域に貢献するとともに世界で躍動する大学」をコンセプトに掲げる龍谷大学が目指しているのは、そのような課題に取り組むマインドと能力を備え、グローバルに活躍できる人材の育成だ。

そのために同大学では教育組織の再構築や多文化共生キャンパスの実現、在学生の留学機会の拡充などに継続的に取り組んでいる。そして、一連の改革の一つとして、2015年4月に新たに登場するのが「国際学部」(国際文化学部を改組)と「農学部」の2学部だ。

京都府京都市・深草キャンパスに設けられる国際学部は、「グローバルスタディーズ学科」と「国際文化学科」の2学科。

滋賀県大津市・瀬田キャンパスの農学部には、「植物生命科学科」「資源生物科学科」「食品栄養学科」「食料農業システム学科」の4学科が設置される。

両学部ではどのような教育が行われ

るのか。国際学部グローバルスタディーズ学科に就任予定の清水耕介教授、農学部食料農業システム学科に就任予定の香川文庸教授に話を聞いた。

国際学部

グローバルスタディーズ学科は 半年以上の留学が必修

グローバルリーダーの育成を目指す「グローバルスタディーズ学科」では、1年次に語学留学と同等レベルの学習

量・学習環境で英語を習得。その英語力を生かして2年次に半年以上の留学が必修となっている。留学先はカリフォルニア大学バークレー校など世界のトップ大学。そして、全員が単なる語学留学ではなく、英語で専門科目を学ぶ専門科目留学を目指す。また、2年次以降は講義の8割が「英語」か「日本語+英語」。さらにTOEIC®730点などを卒業要件としている点も特長だ。

世界と日本をつなぐ人材を育成する「国際文化学科」は、英語以外の言語も幅広く学べる点が特色。第2外国語はフ

図1 国際学部グローバルスタディーズ学科の留学制度

● 正規専門科目留学を目指す提携留学

世界ランク8位の大学への留学も!
グローバルスタディーズ学科では、学生全員が「単なる語学留学」を超えた「専門科目留学」を目指す。提携留学先は、世界大学ランキング8位のカリフォルニア大学バークレー校(写真)をはじめ世界のトップクラスの大学だ。



提携留学先(2014年8月現在)

-  カリフォルニア大学バークレー校(アメリカ)
University of California, Berkeley
-  ワイカト大学(ニュージーランド)
The University of Waikato
-  ディーキン大学(オーストラリア)
Deakin University
-  カリフォルニア州立大学フラトン校(アメリカ)
California State University, Fullerton
-  モナッシュ大学(オーストラリア)
Monash University



清水耕介教授

では、同学部ではどのような人材の育成を目指しているのだろうか？ グローバルスタディーズ学科の取り組みについて清水教授は次のように語る。

世界が抱えている課題を身近な問題としてとらえる

「学科専攻科目でエシックス（倫理）領域を設けているのは

本学科の特色の一つ。私はその中国際関係関連科目を担当しますが、これらの科目では、例えばコンゴの紛争の話をします。紛争の一因は私たちが使っている携帯電話の材料でもあるレアメタル。このように世界のさまざまな問題が自分たちの身近な生活とつながっていることを理解し、問題意識を高めてほしい。どうすれば自分が得をするかではなく、どうすれば社会に貢献できるかを考える人を育てていきたいですね」（清水教授）

実際にグローバルな舞台で課題解決に臨むには高度な英語力と専門性、さらにチャレンジする気持ちが求められる。

「だからこそ英語は徹底してやります。本学科には、語学教員以外にも海外で学位を取得した教員がそろっていますから、サポートは万全です。また、専門科

目留学は非常に大変ですが、そこで苦労も経験してほしい。それを乗り越えることで本当の意味で課題を解決できる力を養われるのですから」（清水教授）

専門性を深めるため、卒業後に海外の大学院に進学するという進路も目標の一つ。ハイレベルな教育で世界の課題に取り組むリーダーを育てる。

農学部

社会科学と自然科学との融合で「食」と「農」の課題に挑む

農学部の学科構成は、農作物の生命のメカニズムに始まり、栽培、加工、流通を経て人々が食べるまでの「食の循環」プロセスに対応したものとなっている。理系（自然科学）・文系（社会科学）それぞれの視点から、さらにその双方を融合させた視点から「食」と「農」の課題に迫っていく点が大きな特色だ。

理系の専門性を養うのは「植物生命科学科」「資源生物科学科」と「食品栄養学科」。文系の視点を磨くのは「食料農業システム学科」。

植物生命科学科は生命科学領域から植物の細胞や機能などを研究する学科、資源生物科学科は農作物を育てる

図2 国際学部2学科のカリキュラムイメージ

	1年生		2年生		3年生		4年生	
	1 Semester	2 Semester	3 Semester	4 Semester	5 Semester	6 Semester	7 Semester	8 Semester
グローバル スタディーズ 学科	●学科基礎科目		●留学 半年以上の留学が必修。語学留学でない学部正規留学を目指す。必修留学期間中の留学先の学費は大学が負担する		●プロジェクト演習		●演習	
	●学科外国語科目 必修は英語のみ。1年次に集中した英語学習を行い、留学先の授業についていけるだけの英語力を磨く。卒業までにTOEIC®830点、IELTS®6.5を目指す				●学科外国語科目		●海外インターンシップ	
					●学科専攻科目			
国際文化 化学科	●学科基礎科目		●学科専攻科目		●演習			
	●学科外国語科目 必修外国語は英語のみの1言語集中型と、2言語型がある。2言語型は、英語のほか、フランス語、中国語、ロシア語から1言語を選択		コース選択		●多文化共生コース			
					●世界と日本コース			
					●芸術・メディアコース			
●海外留学 [交換留学・私費留学・短期留学 (学科企画・コース企画・自己応募)・BIEプログラム]								
			●国際文化実践プログラムI			●国際文化実践プログラムII		

図3 農学部4学科の特徴的な学びの一例 ※内容は変わる可能性があります

<p>植物生命科学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 環境応答と代謝調節をキーワードとした農場を起点とした植物の生理現象に着目し、生命科学的な視点から分析 ● 昆虫と植物の相互作用を植物側と昆虫側とから見比べる視点を身につけることで、生き物の進化を理解する ● 遺伝子と染色体をキーワードとした農作物、特にムギ類の遺伝現象に着目し、細胞遺伝学的な視点から分析する 	<p>資源生物科学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 果樹・野菜の主要栽培品種の、品種特性や栽培・保存・利用について理解を深める ● 病害虫の生理・生態学的特性を理解し、その防除法を確立する ● 土壌の理化学的および物理性について理解を深める ● 環境との調和に立脚した作物生産技術の開発を行う
<p>食品栄養学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 食物の嗜好性や摂取による満足感に関する、生理学および調理科学的手法を用いた研究 ● 運動と栄養摂取による健康増進・体力増強効果に関する研究 ● 運動選手への、運動種類別の栄養サポートに関する研究 ● 機能性食品の働きと摂取効果に関する研究 	<p>食料農業システム学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 日本および世界の食料・農業問題を理解し、その解決策を探る ● ビジネスの観点から「食」と「農」にかかわる現実問題を考究する ● 食品の生産・流通・消費の流れを一連のシステムとして理解し、分析する ● 各地の食文化や地域文化を理解する ● 農業と地域環境・地球環境のかかわりについて考える

技術の開発や環境条件の整備などを研究する学科だ。食品栄養学科は、“食”をテーマに栄養と健康について学ぶ学科。食文化なども扱う。

そして、食料農業システム学科は、「食」や「農」にかかわる問題を社会や経済の仕組みの観点からとらえる社会科学系の学科だ。

1年次後半から2年次前半にかけての1年間、全学科が合同で行う「食の循環実習」(必修)では農作物の作付け、栽培、収穫、加工、販売の一連のプロセスを体験。また、在学期間を通して、関心がある他学科の科目を履修すること

もできる。自分が所属する学科の領域を超えた幅広い視野を養うことができるカリキュラムも自慢の一つだ。

「例えば、世界の飢餓問題は偏った視点からのアプローチでは解決できません。農作物を効率的に生産する技術を生み出すことも大切ですが、一方で、食料を分配・流通する仕組みについても考える必要がある。これは農学の未来を担う学生についてもいえることです。社会や経済を知らない技術者・研究者は本当に世の中の役に立つものは提供できませんし、農業や食べ物の特性を知らない人には農作物の生産や流通にかかわる経済問題の解決はできません。また、食は生命にかかわる問題ですから、倫理について学ぶことも大切。だからこそ、本学部では横のつながりを重視した教育に取り組みます」(香川文庸教授)

その意味で、農学部社会科学系の食料農業システム学科が存在することの意義は大きいといえる。



香川文庸教授

「農業や食品は通常の経済学や経営学の論理だけでは通用しない分野。食べ物には腐ってしまいますし、農家や農村は株式会社の論理では分析できない。そのため、『食』や『農』の特性を加味した社会科学的アプローチが必要になってきます」(香川教授)

そして、実際に課題解決に取り組むためには、自分で情報を集め解析する力を養うことも必要だ。そのために現場での実践的な学びも重視している。

農家や企業を訪ねて 現場の生の声に学ぶ

「4学科すべてにインターンシップや体験実習の場を豊富に設けます。過疎地域の農村、卸売市場、小売店、農薬会社などに行き、現場の人たちの話を聞き、何が問題なのかを体験的に理解してもらいたい。そのほか、海外農業体験実習などの機会もある。これらの経験を通してきちんとコミュニケーションをとれる人材を育てたいですね」(香川教授)

さらに、食料農業システム学科では、データに基づいて自分の見解が述べられるよう、基礎的な統計学的手法や統計ソフトの使い方、文献の探し方などについて1年次から少人数制のゼミで丁寧に指導。データ分析力×フィールドワークで課題解決力を養っていく。

「今、地域、自治体、農業関連団体、食品関連企業など多くの現場で、農業と社会・経済・ビジネスの両方がわかる人材が求められています。将来は、さまざまな立場から、食と農の課題解決に取り組んでもらいたいです」(香川教授)

*

国際学部、農学部に通ずるのは、高い倫理観に基づいた問題意識の醸成と、学外での体験的な学びによる実践的な力の強化。そこにそれぞれの専門的な学びが加わり、課題解決能力が養われていく。

両学部が輩出する人材がリーダーとして社会の各分野でどのような活躍を見せるのか、今から期待される。